

「點化の妙」

— 大窪詩佛における古句受容の展開 —

山口句

一 はじめに

江戸時代最高の流行詩人大窪詩佛の第一詩集は寛政五年（一七九三）刊の『卜居集』である。新鋭詩人としての輝かしい出発であったが、この詩集に対する詩佛の自己評価は極めて低かった。六年後の寛政十一年（一七九九）に刊行された『詩聖堂詩話』（第六話）

には『卜居集』に関して、「人の勧めに因て梓に上す。今に至て臍を噬めども及ばず」の語が見られる。『卜居集』の出版を後悔しているというのである。ではその『詩聖堂詩話』発言と同時期の詩佛の詩はどのような詩なのであろうか。それは一年後の寛政十二年（一八〇〇）刊の『詩聖堂百絶』で見ることが出来る。この詩集は『詩聖堂詩話』の発言の時点での詩論・詩の技倆を具体化させた作品集だと考えられる。時期的に近しいだけではなく取り上げられる作品自体も共通する部分があり、同じ意識のもとに書かれていると思われるからである。一例をあげれば、「山本汎居緑陰茶寮庭前有紅梅一樹比已結實葉間更發西三點白花（山本汎居が緑陰茶寮の庭前に紅梅一樹有り。已に実を結ぶ比るほひ、葉間、更に西三點の白花を

発く。）」の詩は『詩聖堂百絶』19詩と『詩聖堂詩話』21話の双方に掲載されているが、『百絶』の詩題だけではわからない師匠山本北山とのエピソードを『詩話』には載せている。詩論と実作が必ずしも併行的に進行するわけではないにしても、第一詩集『卜居集』と第二詩集『詩聖堂百絶』を比較することで詩佛の後悔の理由、詩に対する評価、詩風や技倆の変化を探ることができよう。

大窪詩佛が自身の詩風を完成していく中で、自身が言うように第一詩集『卜居集』から第二詩集『詩聖堂百絶』にかけて実際に詩風の変化はあるのか。ここではそれを古句の受容という具体的な表現において差異の有無が指摘できるのかという点にしばって、二つの詩集の表現を比較検討していく。ここでいう古句受容とはいわゆる故事典拠のことではなく、過去の詩の表現を自詩に利用することである。漢詩は既にある詩語を用いて作るのが基本なので、古句の受容自体は当然のことである。したがって受容の方法、どのように古人の句を取り入れるかというのが詩佛周辺でも一つの問題になっていた。『詩聖堂詩話』曰く「點化の妙」である。點化は古人の詩句を改めて新機軸を出す意の語だ。具体的に示すと、晩唐の詩人韓偓

の「懶起」の詩に「昨夜三更雨、今朝一陣寒」の対があるが、この古句を受容した対に「寒窓昨夜三更雨、溪水今朝一尺肥」がある。これは信州中野の柏木如亭の詩社「晚晴吟社」のアンソロジー「晚晴吟社詩」の一編「山家」2詩であり、作者は、如亭の門人で藤義敦自厚なる人物である。「晚晴吟社詩」は前述の「詩聖堂百絶」と同年に刊行されていて、大窪詩佛の詩評が加えられているが、この詩には「韓偓の三更聯・石湖の三寸対、皆な却て圧倒す」とやや過褒の評が付されている。石湖の聯とは南宋の范成大の「昨夜榕溪三寸雨、今朝桂嶺十分寒」であり、この受容もまた指摘されている。「山家」詩が両者を取り入れて作られたことは明らかであり、それに対する詩佛の評価は結果として両者を圧倒しているというのである。その評価の当否はともかく古句の受容というのはこのように詩人たちにとって意識的な問題であったのである。

もう一つの問題として、詩佛の詩風が「點化の妙」と言われるように変化したとしてもその変化は当時の詩壇の変化、流派の変化、個人の変化といずれに属すのかが、がある。当時は江戸詩壇全体が古文辞格調派から清新性靈派へという旧詩風から新詩風への転換期であり、詩佛はその新詩風の寵児であり旗手を自認していた。「詩聖堂詩話」四十三話に見る、詩佛と如亭が詩社結成時に「痛く世の李王を為す者（古文辞格調派の詩人）を斥」けたところ「格調の徒、猪のごとく怒り、虎のごとく視て、議論諷刺として止ま」なかつたという。やや誇張に過ぎる表現かとも思われるが、詩佛の急進的な主張に対する保守派の反応が窺われる。また、詩佛「卜居集」21詩

に江戸の詩風はだいたい新詩風に移ったという勝利宣言のような詩がある。海君玉を送る詩に当時江戸を離れていた盟友菊池五山への言付けを加えた詩である。「一言唯為池生道 都下詩風大半移。（一言 唯だ池生が為に道へ 都下の詩風 大半移ると）」の二句である。中野素堂の評には「其所自任可想。（其の自任する所、想ふべし）」とある。こうした時代の動きの中である詩人の詩風の変化が個人に帰すものなのか、流派に帰すものなのかという視点も念頭に入れておきたい。そして更に、詩人個人の変化・動きの中には流派論詩風の変化とともに、それとは無関係な詩人の技倆の変化（主に上達であろう）がある点もある。時代の変化と個人の変化は同時に起きていて、詩壇全体が詩風の変化を続ける中で、詩人個人の詩風もまた固定的な点として捉えることはできない。その上に表現者としての熟達の段階も様々なのである。

一読して漠然と違う読後感を持つ「卜居集」と「詩聖堂百絶」だが、その違いはどこから来るのか。以下、それを全く詩の表現の上から明らかにしたいという試みでもある。両詩集における詩佛の詩の表現の変遷と意味をその作品に即して考えてみたい。

二 『卜居集』の習作性

最初に詩佛が否定的だった「卜居集」の古句の受容の中から、ほぼ原詩の形・意義のままのものを列挙してみる。

七言句では、「村家」2詩の「八句猶健白頭翁（八句 猶ほ健なり 白頭翁）」は「聯珠詩格」の向雪湖「田家」の「老翁八十猶強健

(老翁八十猶は強健)、「山居」92詩の「閑中事業君知否(閑中の事業君知るや否や)」「は陸游「舟中遣懷」の句と同一、「冬夜」56詩の「冷魂一夜遙孤山(冷魂一夜孤山を遶る)」は、『聯珠詩格』周南峰「梅」の「夢隨烟雨繞孤山(夢は烟雨に隨て孤山を繞る)」から。三字句や四字句では、「山居」97詩「丘壑與波波底月(丘壑の興は波底の月の如し)」の「波波底月」は楊誠齋「中秋與諸子果飲」の「酒入銀河波波底月(酒は入る銀河波波底の月)」、「回望惠山」の「簸弄太湖波波底月(簸は弄す太湖波波底の月)」など。「送小野崎尚甫之大坂(小野崎尚甫の大坂に之くを送る。)」43詩には「懸崖破棧從鞍馬(懸崖破棧鞍馬に從せ)」の「懸崖破棧」は范成大の「懸崖破棧不可玩(懸崖破棧玩るべからず)」、同じ詩の「行過長亭與短亭(行き過ぐ長亭と短亭と)」には、李白「何れの處か是れ帰程 長亭 更に短亭」など。菅茶山にも「長亭は楊柳 短亭は花」の句がある。さらに同詩の「稻花吐雪雨痕馨(稻花雪を吐て雨痕馨し)」には范成大の「江頭一尺稻花の雨」の類句がある。「山居」106詩「吾は常南一布衫(吾は是れ常南の一布衫)」の「一布衫」は楊誠齋「出眞陽峽十首園其一」の「知我猶藏一布衫(知る我れ猶は一布衫を藏するを)」の語彙。「偶成」113詩「閑身又是比僧忙(閑身又是れ僧に比すれば忙なり)」は、僧侶に比較すれば閑とは言えないという類想句「若比老僧雲未閑(若し老僧に比すれば雲未だ閑ならず)」(山中僧・天隨子)がある。原詩は『連珠詩格』と更に『詠注連珠詩格』(詩仏の盟友柏木如亭著)にも取られている詩だ。

対句に関しても原詩そのままの受容が見られる。「山居」91詩

「筍鞋藤杖涉潺湲(筍鞋 藤杖 潺湲を渉る)」の「筍鞋藤杖」は唐・張籍の「題李山人幽居」に「画苔藤杖細踏石筍鞋輕(苔を画く藤杖細く石を踏む筍鞋輕し)」の対句を句中対に変形して用いたものである。「山居」99詩「貧去唯慙添酒債 病來不管少詩名(貧し去て唯だ慙づ 酒債を添ふることを 病來 管せず 詩名を少くを)」の詩名と酒債の対は「酒債應多處 詩名自一家(酒債 應に多き處 詩名 自ら一家)」(明・高啓「臨頓裏十首其五」)など既に例がいくつもある。「宮怨」109詩「莫論春綠早兼遲 一得秋霜孰不萎 長信宮中啼月夕 昭陽殿裡舞花時(論ずること莫かれ 春緑の早と遲と 一たび秋霜を得ば 孰か萎まざらん 長信宮中 月に啼くの夕 昭陽殿裡 花に舞ふの時)」は、格調派の奉じた盛唐の王昌齡「長信秋詞五首 其五」「長信宮中秋月明 昭陽殿下搗衣聲 白露堂中細草 迹 紅羅帳裏不勝情(長信宮中 秋月 明らかに 昭陽殿下 搗衣の聲 白露堂中 細草の迹 紅羅帳裏 情に勝えず)」と、対句と草の詩想を共通し、全面的にこの詩の影響下にある。また、「宮怨」の詩題や「秋霜」の比喩なども唐詩の世界である。

以上のように『卜居集』には古句をそのまま或いは小変更を加えただけで自詩に取り込んでいく手法が随所に見られる。こうした手法は詩の表現法の学習段階の位相で、初心の行う素朴なレベルである。言葉を利用するだけであり、原詩と比べて新機軸はない。そして、予想されるようにその原詩は『聯珠詩格』や南宋三大家のものなど比較的狭い範囲であり、当時の詩佛の学詩の範囲を想像させる。また、句のような部分的な問題ではないが、連作という手法にも

古人のアイデアをそのまま利用したいくつかの連作がある。「山莊十首」、「山居三十首」、「田家二首」、「村居四時田園雜興十九首」である。

第一句が全て「我愛山莊好（我れ山莊の好きを愛す）」で始まる「山莊十首」の連作は、楊誠齋「和羅巨濟山居十詠」の同じく五律十首の連作がある。また、宋・方秋崖に「山居二首」の五律がある。二作品ともこの連作と同じように「我愛山居好」で始まる。さらに宋・真山民にも「我愛山中」で始まる四首の連作「山中雲」「山中月」「山中梅」「山中松」がある。この「山莊」の連作のアイデアは更に「山居三十首」に拡大発展する。平声三十韻を全て用いた意欲作であるが、それ故に習作的作品でもある。

「田家二首」17詩は小品だが、范成大の「四時田園雜興」・『聯珠詩格』「田家」からの直接的影響が見られる。「吉日」、また「練車」は陸游「春日小園雜賦」にある語だ。その二首め「田家二首その2」108「戸々葉蚕方已熟 練湯湧兮上練車 數端素絹都充稅 纒為兒孫長丈餘（戸々の桑蚕 方に已に熟す 練湯 雪を湧して 練車に上す 數端の素絹 都て稅に充つ 纒に兒孫の爲めに丈餘を長うす）」は「四時田園雜興 夏日」の十二首（南宋・范成大）の四首目「百沸練湯雪涌波 練車嘈噴雨鳴糞（百沸の練湯 雪 波に涌き 練車 嘈噴として 雨 糞に鳴る）」と五首目の「小婦連宵上絹機 大耆催稅急於飛 今年幸甚蠶桑熟 留得黃絲織夏衣（小婦 連宵 絹機に上り 大耆 稅を催すこと 飛ぶよりも急なり 今年 幸甚に蠶桑 熟す 黃絲を留め得て夏衣を織る）」の世界を詩句を換えながら敷衍している。

「村居四時雜題十九首」17詩も詩題からわかるように四時田園雜興の影響下にある連作である。全体の詩の数は原詩より少ないが四季の分類は同じである。

このように「卜居集」には全体に素朴な習作性が強く見られる。しかし、中にはその域を脱して、評者の中野素堂が激賞している二首がある。次の二首である。

「偶成」24詩「間追暖日向南廊 廢却鴨爐兼鹿床 為是梅花無數 發 淨窓半月不焚香（間に暖日を追て南廊に向ふ 廢却す 鴨爐と鹿床と 是れ梅花無數の發くが爲に 淨窓 半月 香を焚かず）」の結句は楊誠齋の「南齋前の梅花」、「兩樹相挨前後發 老夫一月不燒香（兩樹、相挨て前後に發き、老夫、一月、香を燒かず）」の句の受容である。しかし、評では「知らざる者は或は此を以て之を襲ふと爲さん。蓋し、天民、偶ま記せずして、暗合する者なり。」という。そして、誠齋の句は二本の梅が相前後して咲くから「一月」といい、詩佛の詩は一本の梅だから「半月」なのだといひ、それぞれの工夫を見るべきだという。『卜居集』の時点において「淨窓半月不焚香」は詩佛の得意の句であったというだけに前述の素朴な古句受容より意味内容にあわせた工夫がなされた変更といえよう。

もう一つは、「山莊」32詩の対で、「小溪三寸雨 老屋半間雲（小溪 三寸の雨 老屋 半間の雲）」である。「小溪三寸雨」は、范成大的「送周直大教授歸永嘉」七律の第三句「昨夜榕溪三寸雨」を受容したものだが、「巧み、小の一字に在り」という。単に「三寸雨」と數字をいうだけでなく「小溪」の水位が「三寸」増す「雨」であ

ると字が響きあうということであろう。ちなみに「老屋半間雲」も『聯珠詩格』、『訊註聯珠詩格』55「日暮白雲棲半間（日暮白雲半間に棲む）」56「老僧半間雲半間（老僧半間雲半間）」などによる。原詩の表現をより精密にしたことだろう。

このように「卜居集」における古句の使用は語彙そのものや句の作り連作の手法など習作的な面が多く見られたが、その中で古句の原詩とはニュアンスを変えた使用をした例が詩佛得意の句としてあり、また評者にも高い評価を受けたというのが、この時点における古句受容の段階であった。

三 『詩聖堂詩話』の「辞に主有り」説

詩話中に引用される具体的な作品を検討する前に詩佛自身が古句の用い方に直接言及している部分を見よう。『詩聖堂詩話』三十話である。「疎影暗香の字の如き、一たび林君復の手に落ちて、千載、梅を詠ずる者、復た侵すべからざるなり。是れ辞に主有りと謂ふ」という主張である。これは極めて大胆な説である。梅に関する名詞の中の名詞として名高い宋・林逋の「山園小梅」の「疎影横斜水清淺、暗香浮動月黃昏」は非常に多くの梅の詩に影響を与え続けている。疎影・横斜・清淺・暗香・浮動・黃昏などと二字に分解してもそれぞれが単独に梅をおおむね縁語になっている。こうした語を使わないで梅の詩を作るのが難しいほどになっていて、既に夥しい数の詩が存在しているのである。そういう実際の場で詩佛は、「疎影暗香」は作者林逋のもので、そうした語を梅の詩には用いてはいけ

ないというのであるから、従来の詩語の使い方を全面的に批判したことになる。この理屈は詩佛独自の主張であって必ずしも当時の格調派と清新派の違いのとも一致しないと思われるが、師匠山本北山がその著「作詩志毅」において唐詩の模擬剽窃の具体例を載せて激しく攻撃したのを思わせる急進的な主張である。林逋の場合は宋詩であるが、同じく模擬剽窃の問題であったのであろう。漢詩に使用する詩語は全て古典に由来するものであるので、北山は単純にその詩語使用だけをもって批判したのではなく、その使い方の拙劣なのを批判したのであるが、詩佛はその語自体が詩人のオリジナールに属するものとして使用自体を禁じたのである。前述したように『卜居集』では原詩のままの古句受容は多く見られたのであるからこれは自己批判でもある。

では、以下に具体的な作品に即して古句受容に触れた部分を見る。まずそれは第四話にある。寛政七年、伊勢の一乗山寺の出来事である。その概要は、「朋友中野素堂と寺内を散策しているときのこと、素堂が、「院静似無僧（院静にして僧無きに似たり）」と吟じると、詩佛が、「門開如有客（門開て客有るが如し）」と和した。素堂は詩佛の句を誉めて、「夜深く雨有るの對に勝れるや遠し」と。自分でもひそかに僧院莊嚴の象を描き得たと思った。ここで素堂が吟じたのは、宋・潘閬「夏日宿西禪院」の「夜涼如有雨院静若無僧（夜涼にして雨有るが如く院静かにして僧無きが若し）」の対句中の一句である。既に対句として作られた句であるが原詩の対よりも詩佛の即吟の対の方が優れているというのである。

門の開閉から客の有無を想像する点が夜の深さ（原詩は正確には深ではなく涼）から雨を想像する常識よりも飛躍があつて面白いということであろう。

また、『詩聖堂詩話』中で詩佛と同じ江湖詩社の詩人小島梅外の句を古句受容に關して絶賛している段がある（14・15段）。「夜景」の、「驚飛不遠一齊去 過箇蘆叢落水聲（驚飛 遠からず 一齊に去る 箇の蘆叢を過て 水に落る聲あり）」の転結二句を「流麗」「新裁を出す」という。この二句は唐の杜牧の「驚鷺」の転結「驚飛遠映碧山去 一樹梨花落晚風（驚飛 遠く碧山に映じて去り 一樹の梨花晚風に落つ）」をふまえており、遠く飛び去る鷺が梨の白い花が舞う視覚的な原詩のイメージに対して、鷺は遠くへは行かなかつたのが近くの水音でわかるという聴覚的な句に変えた。言葉は似ていても現象も感覚も全く異なる世界に仕立てている。また、同じ梅外が、陳簡齋の「柳絮」の詩、「顛狂還作高千尺 風力微時穩下來（顛狂 還て高さ千尺を作し 風力 微なる時 穩に下り来る）」を「蒲公英（たんぽぽ）」の詩として、「欲落還颺二三尺 風微緩渡野流來（落ちんと欲して 還た颺る 二三尺 風微にして 緩く野流を渡り来る）」としたのを「能く點化の妙を得たり」とした。柳絮をタンポポに、千尺を二三尺に、下るを渡るとして全く別物にしている。そして詩佛自身も同じ手法で、最前の杜牧の「鷺」の詩、「一樹梨花落晚風（一樹の梨花 晚風に落つ）」を反用して、「棣棠花（やまぶき）を咏ず」詩「幾雙黃蝶落風前（幾雙の黄蝶 風前に落つ）」としたという。鷺が舞うのを梨の花に例えたのに対し、逆に花が舞うのを蝶に例え

ているのである。

また、庭の紅梅に白い花が咲いた時に、その梅を詩佛が楊貴妃の姉「虢國夫人」に喩えて「儷卸紅粧試舊姿（儷に紅粧を卸して舊姿を試む）」の句を作ったところ、師の山本北山に「虢國は淫行の女子。以て梅花の清白に比すべからず」と叱正されたというエピソードがある。詩佛にしてみれば実は「虢國夫人」を梅に例えるのが點化の妙であつたらう。それまでの詩、例えば「三體詩」張祐「集靈台」などに見られるように虢國夫人の詩は、美貌を誇り傲慢に振舞ったことを描くのが普通であつたからだ。前述のとおり、この詩は「詩聖堂詩話」「詩聖堂百絶」の双方で紹介されているので自信作なのであろう。

こうした點化の妙を得た詩佛や梅外の詩句に対して、『詩話』で紹介される詩佛から見て新進の詩人たちの句は未だに『卜居集』の位相を出ていない。山田櫻宇「春日晏起」の「暖被醒來初轉枕 滿窓花影午鷄聲（暖被 醒め来て 初て枕を轉ずれば 滿窓 花影 午鷄の聲）などは、范成大「四時田園雜興」の「柳花深巷午鷄聲。桑葉尖新綠未成。坐睡覺來無一事。滿窓晴日看蠶生。」と語彙を共通する習作的作品と思われる。また、中井董堂「夏日田園」の「村村麥熟小豐年（村村 麥熟す 小豐年）」も范成大「夏日田園雜興」に「小豐年」の語がある。珍しい女流詩人として紹介される木端人の妻、順姑に「春曉」の作がある。その詩、「昨夜庭前風雨過 朝暾紅映碧窓紗 黃鸝百轉眠初醒 獨對海棠看落花（昨夜 庭前 風雨過ぐ 朝暾の紅は碧窓紗に映ず 黃鸝百轉 眠初て醒む 獨り海棠に對して 落花

を看る」は唐の孟浩然のあまりにも名高い「春眠 曉を覺えず」の「春曉」詩とほとんど同想である。原詩をあげておく。「春眠不覺曉 處處聞啼鳥 夜來風雨聲 花落知多少（春眠 曉を覺えず 處處に啼鳥を聞く 夜來 風雨の聲 花 落つること 知らず多少ぞ）」。

このように詩佛や梅外のような先端の詩人たちは點化の妙ということ意識して詩作し始めていたが、それより格下の詩人たちは相変わらず『卜居集』時の詩佛と同じ位相にいたのである。

四 『詩聖堂百絶』の「點化の妙」

前項で見た『詩聖堂詩話』は散文なので詩が文中に取り上げられる詩話とは言え、詩の数は少なかつた。そこで見るべきは『詩聖堂百絶』である。絶句に限った詩集なので律詩が得意と言われる詩佛の詩風を探るには十分でないが、古句の受容だけを見るには詩佛は関係なくほぼ全詩体を見るのと同じ結論が予想される。この時期の詩佛の詩集は他に残っていないのである。

古句を利用しただけの素朴で習作的作品は少なくなる。例えば、4詩「東叡山看花三首（2）」の「山後山前一一尋（山後山前一一尋ぬ）」の「山後山前」の四字句は『詠注聯珠詩格 盧玉川「山中」に「偶従山後到山前（偶たま山後より山前に到る）」に依つていようし、「不知身已在深林（知らず 身は已に深林に在ることを）」の表現は范成大「入崇寧界（崇寧界に入る）」に「不知身已在彭州」の句があるのを始め慣用的とも言える表現である。

それに対して、転用と言えるものが多くなる。2詩「看梅歸途遇

雨（梅を見て歸途、雨に遇ふ）」の「好將微濕健梅花（好し 微湿を將て梅花を健にせん）」の「健梅花」の三字句は楊誠齋「春寒絶句」に「半點輕寒健牡丹（半点の輕寒、牡丹を健にす）」の句があり、この楊誠齋詩は後に詩佛と菊池五山編の『広三大家絶句』にも掲載されている。「健梅花」の句は比較的珍しい語法で「健牡丹」に学んだから可能になった表現であるうが、シンプルながら対象も詩の世界も全く異なるものになった。

9詩「初夏園中即事三首」「閏年不覺黃楊退 只有詩思減幾分（閏年 覺えず 黃楊の退くを 只だ詩思の幾分を減ずる有り）」は難解の句だが、「黃楊退」は禪語で、黃楊木禪といい、黃楊はもともと成長が遅いが、閏年はかえって縮小するの意である。ここの閏年は、寛政十二年と見られ、閏四月があった。詩には現れないテーマであるが、楊誠齋「九日菊未花」に「舊說黃楊厄閏年（舊と説く、黃楊、閏年に厄すと）」（厄は伸びるのを阻まれる意）とあるのを受容したと見られる。内容はやはり別になっていて、閏年なのに黃楊の縮むのがわからないというのである。

53詩「送佐藤大道西遊（佐藤大道の西遊するを送る。）」の「五千里外行遊客 八九月交歸去期（五千里の外 行遊の客 八九月の交歸去の期）」は非常に名高い白居易「八月十五日夜禁中獨直對月憶元九」の前聯「三五夜中新月色 二千里外故人心（三五夜中 新月の色 二千里外 故人の心）」の転用である。佐藤大道は一齋でこの時の詩に「三千里外獨遊人（三千里外 獨遊の人）」の句がある。これなどは原詩が有名すぎる詩なので普通の転用が詩の表現の手段とし

てなのに対して、どのように転用するかが詩の見せ場ということになる。

以上のように簡単な転用であってもそれぞれに工夫が凝らされていることがわかる。

さて最後に、『卜居集』には見られず『詩聖堂百絶』だけに見られるより複雑な転用や逆用を見ていく。

まずは11詩「初夏園中即事三首(3)」の「簾影參差日欲斜 學飛燕子傍檐牙 東君不敢收春去 猶剩薔薇一架花(簾影 參差として日斜ならんと欲す 飛ぶを學ぶ燕子 檐牙に傍ふ 東君 敢て春を収め去らず 猶は剩す 薔薇 一架の花)」の「薔薇一架」である。この原詩は唐・高駢「山亭夏日」であろう。「一架薔薇滿院香(一架の薔薇、滿院香し)」の句がある。原詩では夏日だが山亭でもあり滿院に香っている薔薇の一架の花であるが、詩佛詩では春の神の東君が初夏だというのにまだ去らずに一架の薔薇の花が咲き残っているというのである。結果として同じ現象になるが過程が異なっている。

30詩「新寒」「一味新寒未慣身 綿衣重着起清晨 通宵下盡滿庭葉 又得茶爐半日薪(一味の新寒 未だ身に慣れず 綿衣 重ね着て清晨に起く 通宵 下り尽す 滿庭の葉 又茶炉半日の薪を得たり)」の結句は、唐・李涉「題鶴林寺」の結句「又得浮生半日閑(又た得たり、浮生半日の閑)」を、句の構造はそのままに原詩の閑適の内容を日常卑俗で具体的な薪という物に転用し、李涉は閑を得たけれども自分は薪を得たというのである。原詩の面影を利用して

表面的な意義とのずれを生じさせて一種の諧謔味を出すという高度な技法になる。単に落ち葉を集めて薪を得たという意味内容を伝えるだけの句だったら凡庸な詩となったであろう。

41詩「偶成」「半庭殘月凍窓紗 衾薄春寒曉更加 自覺詩情零落盡 近來不復夢梅花(半庭の残月 窓紗に凍る 衾 薄うして 春寒 曉 更に加ふ 自ら覚ゆ 詩情の零落し尽るを 近來 復た梅花を夢みず)」の「近來不復夢梅花」である。これはもとが詩ではなく『論語』である。述而篇に「子曰、甚矣。吾衰也。久矣、吾不復夢見周公也(子曰はく、甚しいかな、吾が衰るえたるや。久し、吾れ復た夢に周公を見ず。)」とあるのを詩に転用した。夢みる内容が周公と梅花では全く異なるが、孔子が生真面目に古の聖人を思う強さを、風流人が梅花を思う強さに転用したのであり、嘆きを表現しつつもやはり諧謔の味が出る。同じく論語の表現を利用した詩が『卜居集』にある。「山居」91詩の「棗樞處士名元憲 陋巷先生姓舊顏 此意尤欣古人在 世榮於我復何關(棗樞の處士 名は元と憲 陋巷の先生 姓は舊と顏 此の意 尤も欣ぶ 古人の在ることを 世榮 我に於て 復た何ぞ關らん)」である。「棗樞」は貧居の喩えてこれは『論語』ではなく「莊子」雜篇・讓王「原憲居魯：桑以為樞」の表現だが、「陋巷」はうらだなの意で、『論語』雍也「賢哉、回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷。」から来ている。「世榮」も「不義而富且貴、於我如浮雲。」(『論語』述而)と同じ意に用いたものだ。『論語』そのままに清貧の表現として利用している。これに比べれば「夢梅花」が點化の妙を示したものとということがわかる。

他に本来と反対や違う意味になる逆用としては、12詩「觀碁五首（碁を觀る 五首）」の「為消晝倦出茅茨 便是閑人無事時 自笑機心未灰盡 却過竹院又觀棋（晝倦を消するが為に 茅茨を出づ 便ち是れ閑人無事の時 自ら笑ふ 機心の未だ灰し尽きざるを 却て竹院に過て 又棋を觀る）」の「却過竹院又觀棋」である。これも前述の唐・李涉「題鶴林寺」の「因過竹院逢僧話、又得浮生半日閑。（竹院を過て僧に逢て話すに因て、又た得たり、浮生半日の閑。）」が原詩である。「却」字は、竹院を過ぎることによって李涉は閑を得たが自分は逆に閑基などを見て忙殺されてしまったのニュアンスである。これも前の詩の薪を得たというのと同じ効果だが、この場合、ずれではなく全く正反対の意味としてむしろ原詩の意味を逆に生かしている。

以上、古句と意味をずらして別の効果やニュアンスをねらったもので「點化の妙」と言える工夫の凝らされた転用である。意味を変えて用いるだけでなく原詩の意味をも利用してオリジナルと逆の意味やイメージを作る技巧的な古句の利用法で、技術的には高いレベルの表現と言えよう。

五 結び

本稿では大窪詩佛が『卜居集』から『詩聖堂百絶』にかけて古句の受容の仕方を意識的に進展させたことを指摘してきた。それは詩の表現の上に明確に表れており、詩人個人としては習作期を抜け出し自己の詩風を確立させていく階段を一つ昇ったと考えられる。

「點化の妙」と言われるように転用や逆用によって自詩の表現に古句を取り込み、表現を多彩にして、その方法によって自在に個性を發揮できるところまでたどり着いたのである。

こうした詩佛の表現の変化というのは、やはり詩壇、あるいは流派的展開ではなく、詩人として習作期から熟達の詩人へ至る展開であったといべきだろう。その古句受容が比較的南宋詩に偏っているなど流派的な特徴もあわせ含んでいるが、素朴な詩語使用から點化の妙というまでの様々な段階の詩人が同流派に同時に併行的に存在することからもそれは時代の変化ではなく、熟達の段階の様々な位相と考えられるからである。性靈派の詩人としてまた詠物詩人として認識されることが多い詩佛であるが、表現そのものの個性というものも読みとっていきたいと考えている。

注1 拙稿「大窪詩佛初期詩集にみる評語について」『成蹊國文』四十四号 平成二十三年三月刊

※ 本文引用は『卜居集』『詩聖堂詩話』『詩聖堂百絶』『晚晴吟社詩』は国会図書館本を使用して私に訓み下し、詩集には便宜上通し番号を付した。

(やまぐち・じゅん 大学院博士後期課程在学)